柳田さんを偲んで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政経資料センター 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, 一新 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10400

柳田さんを偲んで

池　田　一　新

大学院にいわゆる「院生協」ができた時分であったかと思うが，故山中篤太郎先生が，「私の研究室の院生は，自分の研究に手一パイで，あんなものにかかわる時間なんかないと云っている」，といわれたことがあった。今にして思えばその院生が実は柳田さんであったように推測される。私が柳田さんと親しくなったのは，入試グループで御一緒して以来のことである。一番に思い出されるのは，最近は開催が中止されている4月のグループ花見のきっかけを柳田さんがつくったということである。

入試の採点の合い間の雑談のさいに，私が（これも今はやめているが）毎朝，花小金井公園へ自転車で行っては散歩を楽しんでいること，さらには自転車道路を利用して，多摩湖まで遠出をしたこともあるなどと話していたところ，加藤泰男さんが「あの多摩湖の手前の坂は，自転車から降りて上がったんだろう」とのこと。「いや，少ししんどかったが乗ったまま上がりましたよ」と私が云うと，「ええ!?あそこには私も行ったことがあるけれども，ほんとに乗ったまま上がれたのですか？」と柳田さんが疑いの言葉をはさんできた。するとそれに追いうちをかけるように加藤さん「乗ったままは上がれないと思うけどなー」。私にとってはどう考えても乗ったまま上がった記憶しかない。「いや上がった」「それは無理だ」と云い合っているうちに，柳田さん「入試が終わった桜の季節に3人して自転車で行き，上がれるかどうか試してみませんか…。何か賭けますか？」と煽動的な実地検証の提案。そこで加藤さんと私とで「酒一升」を掛ける羽目になってしまった。4月のある日，加藤さんから「テレビによると桜の見頃らしいから，（？）日に行かないか」とのお誘いがあり，その日に決行することになった。加藤さんだけでなく，柳田さんまで「乗ったままでは無理だろう」ということなので，最初は確信に満ちていた私も，日時の経つにしたがって次第に不安になり，当日は一升酒ならぬワインを一本自転車に忍ばせて出かけて行ったが，結果は幸いにも

降りないままで坂を上りきることができた。

それはそれとして，そのあとが大変であった。当日の桜は開花どころか，まだ蕾の状態であり，しかも，その日は生憎と膚寒い日であった。しかし3人とも「坂を上がりきるかどうか」の検証だけに行ったのではなく，むしろそれを口実にしたまでであるから，すぐさま引き返すわけはない。そのまま野外の椅子席に座り込み，出店の熱カンの酒を最初はチビリチビリ，時間の経つにつれてグイグイとやりながら，かなり長時間（私の長時間とは御存知の向きには御存知の通りの長時間である）にわたって談論の花を咲かせた。その間に柳田さんは（日頃はほとんど酒を口にしたのを見たこともないが）鼻水を出しながら，ついには「私も一パイやりましょう」とコップ酒を口にしだしたことを鮮明に思い出す。余程寒かったのであろう。

帰り際に，多摩湖の夕景に見とれて，堤防上に暫し佇んでいたまでの記憶はあるが，その後は，明くる朝，我家で目をさますまでの時間は全く空白のままであった。その朝，自転車はもちろん我家に戻ってはいない。それから2，3日経って柳田さんが，私の留守中に自転車を届けに来て頂いたそうである。驚いたことに，私の自転車とは思えないほど綺麗になっており，乗ってみると軽やかになっているので，お礼をかねてその旨を電話すると，「先生，時には自転車の掃除をしたほうがよいですよ」との御忠告。持ってきて頂くまえに自転車屋さんに手入れをさせたということであった。私輩の到底及ばぬ柳田さんのこの心配りには恐れ入ってしまった。

しかし何と云っても心おさまらぬのは桜の花見が徒労に帰したことである。花より団子とはいえ，折角花見をも楽しむつもりで出掛けたのに，蕾だけでは心残りも甚だしい。そこで，4月初旬に，大学院の新入生歓迎パーティの席で石田忠先生や加藤泰男さんと一緒になり，「石田先生，われわれのグループで花見に行きませんか」ともちかけたところ，「それは結構！」と大賛成の御様子なので，早速皆さんに呼びかけて第1回の花見の宴も多摩湖で決行することになった。

このように述べて行くと話はつきないが，そもそもの花見の仕掛人は，以上の経過からもおわかりのように柳田さんということである。石田忠先生も定年で去

られ，柳田さんは今は亡く，この２，３年は花見の会も開かれないままであるが，毎年４月の季節になると花見，花見というと柳田さんの仕掛けぶりを懐かしく思い出されて仕方がない。年齢を越えた良き友人を亡くしたことは遺憾の極みである。